白い空

溝口　あかり

ある人が、生活するうえでの注意でこんな言葉を言っていました。

「焦らない、無理をしない、頑張らないことが大事」

サウジアラビアの首都、リヤドに着いたばかりの私には、信じられない言葉でした。せっかく観光で入ることが難しい国に来たのに、頑張らないなんてありえない。少しぐらい無理してでも、頑張るべきじゃないの。頑張りを否定するなんて考えられない。

主人の海外赴任で帯同した私は、ベールに包まれた国に来たことで、興奮していました。思えば、私とサウジアラビアの関わりは長いのです。

就職した私は、サウジアラビアとかかわりがある部署に配属になりました。それまで全くアラブの世界に関わりがなかった私には、すべてが新しく勉強の日々でした。だんだん職場に慣れていくと、その地に行きたいと思うようになりました。

「サウジアラビアに出張したいです」

「残念だけど、女性はサウジでは働けないんだよ」

これは、上司の言葉。未知の国にどれだけ憧れたことか。私が本から仕入れた情報は、産油地であり、唯一神を信仰していること。女性は、全身真っ黒な黒衣で覆っているらしい。あとは、謎だらけ。その謎だらけの国に行って自分の目でその謎を解き明かしたい。こんな思いを抱きながらも、結婚のため仕事を辞めることになりました。当時、メールもなく知り合ったサウジアラビア人と連絡方法もない私は、その遠い国のことをいつしか頭から忘れていきました。

結婚して六年後に、青天の霹靂で主人のサウジアラビア　東部地区ダンマン駐在が決まりました。湾岸戦争が終わったばかりのときで、主人から遅れること一年で私は、サウジアラビアの地を踏みました。日本人駐在員は、ごくわずか。かねての夢が蘇り、夢が実現した喜びに胸は、いっぱいでした。異国の地で異文化体験でき

る喜びでいっぱいだったのです。ここでの期間は、三年ほど。あぁ、なんて素敵なプレゼント。

来てみると、ショッピングモールはなく、通りには小さなお店が並ぶのみ。イスラムの戒律が厳しく、一日五回のお祈りは、私の行動を制限します。お祈りの時間になると、一斉に閉まるお店。午後一二時を過ぎると、四時間ほどお店は閉まります。女性の行動には、制限があり、車の運転どころか、一人で外出することもままなりません。電車なし、バスなし。喫茶店なし、映画館なし、歌・踊りの禁止。集会の禁止。飲酒の禁止。我々女性は、いったい何をして過ごせばいいのでしょう。あれほど夢のように描いていた生活は、一か月も経たないうちに、鉛でも呑み込んだように重苦しく沈んだ日々となりました。私たちは、外国人居住地である、高い塀で囲まれたコンパウンドの中で、生活します。幼い子供を抱え、どこへ気持をもっていけばよいかわからず、胸の奥底で悲鳴を上げていました。暗い圧迫を胸に感じ、泥沼に入りこんだ気持ちです。助けを求める私に手は伸びず、「頑張る」気持ちを、どこかに落としてしまったようでした。家に閉じこもる毎日。

空は、砂嵐によるものか、湾岸戦争時の油井炎上によるものか、白く曇る毎日。せめて青い空が見られたら・・・。外は、気温四五度。ため息をつく毎日。心が細る。

昨日と変わらぬ今日。明日もきっと今日と変わらない。白い空は、私を覆う。変わった明日を迎えるには、今日何かを変えなければ。初めて乗ったコンパウンドのショッピングバス。転機はそこから訪れました。

「私は、ここに来たばかりで友人がいません。買い物に、一人で行くのは怖くって。一緒に行ってくれる人がいれば嬉しいのですが」

「あら、私もここに来たばかりよ。じゃ、今度から一緒に買い物に行きましょう。声をかけるわね」

たどたどしい私の英語に、聞きづらそうな顔もせず、にっこりほほ笑む女性。私の中の鉛が、溶け出しました。さ迷い歩いていた子供が、母親を見つけたときのような気持ちです。喜びが心の鉛を溶かし、奥底から喜びが溢れてきました。それからは、バスで会う人会う人に同じ言葉を繰り返しました。揃って最初の彼女と同じ反応をしてくれるのです。私は喜びで、涙が溢れんばかり。最初の彼女から、お誘いの電話がかかってきたときには、心の中で雄叫びを挙げていました。私は、それま

で人に対し、心の生け垣を作っていたのかもしれません。いったん外れた生け垣は、私の背中を押してくれ、いろいろなコミュニティの中に私を連れて行ってくれました。人が人を呼び、紹介され、「たどたどしい英語を話す日本人」と、顔を広げていくことが出来ました。

「私は、彼女を誇りに思います」

ある日本人女性が、私のことをこう言ってくれたそうです。「彼女がこのコンパウンドにいることを、日本人として誇りに思っているわ」最高の言葉です。暗い中をさ迷う私に、打ち上げ花火が上がり、虹と太陽までいっぺんに現れたのです。

私が笑っていると、子供たちも笑っています。子供たちは、私の気持ちが通じたのか、物おじすることなく、どの国籍の人にも関わっていきます。「フレンドリー」この言葉が、学校の成績表に書かれたときは、どんな言葉より嬉しく跳ね上がりました。次第に住めば都と感じるまでになりました。ちょっと自分を変えてみれば、訪れる幸せ。「頑張る」私は、偉い。この地で楽しんでいるではないか。

幸せを感じるころ、「頑張る」三年の生活は、終わりました。

残念なことが一つ。それはとてつもなく大きな残念。サウジアラビアにいながら、一人もサウジアラビア人の知人、友人がいないこと。外出時に会う女性は、全身真っ黒。アバヤと呼ばれる黒衣をつけ顔はベールで覆い、表情すらわかりません。目は、私を見ているのか、まったく別のところを見ているのかもわかりません。微笑んでいるのか、怒っているのかも、わかりません。これでは、声もかけられず。これでサウジアラビアに住んだと言えるのでしょうか。いつか思ったアラブの謎をまったく解き明かしていません。

約二〇年後。今度はサウジアラビアの首都、リヤドに赴任の話が主人に来ました。もう成人している子供二人を日本に残し、主人と二人だけの生活。時間はたっぷりあるので、きっと違った楽しみ方ができるに違いありません。「頑張れば」幸せはやってくる、はず。

二〇年の間にサウジアラビアは、大きな発展をし、高層ビルが立ち並んでいました。大きなショッピングモールがいくつもあり、中にはブランド店が並んでいます。大都市リヤドには、喫茶店、レストラン、ホテル、お菓子のお店がズラリ。女性が

まとうアバヤには、キラキラがいっぱいついて派手になっています。驚くことに、スーパーのレジで女性が働いているのです。

銀行、モールに女性の社会進出が見られ、少しずつですが、社会が変わってきています。現地女性が外国人女性に話しかけることなど、考えられなかったのですが、ごく稀に話しかけられるようになりました。いよいよベールに包まれた謎を解き明かすときでした。

開かれた考えを持つサウジ女性と知り合いになり、「マイシスター」と呼び合う付き合いが始まったのです。ベールを外した付き合いが始まり、文化交流ができるようになりました。これこそが、夢にまで見た生活です。狂喜のあまり小躍りしそうです。いけない、踊りはこの国では禁止でした。

未知の世界に憧れたあの日から、すでに三十年が経っていました。私の体力は、衰えていました。ここぞという時に、気持ちと身体のバランスが崩れ、病気になってしまうのです。こんなはずでは、と奮い立つのですが、身体が言うことを聞いてくれません。「あれもこれもやりたい」と思う気持ちは「焦り」、「無理」をし「頑張れない」自分を作っていました。「頑張る」ことが負担となり、体調不良で続く病院通い。

「焦らない、無理をしない、頑張らないことが大事」

なんて素敵な言葉でしょう。どうやら年齢だけの問題ではないようです。気候、風土、習慣が異なる国で、ひたすら突っ走ることは、自分を潰してしまうようです。私の心と体は、「頑張ること」に焼き尽くされてしまったようでした。

今は、残るここの生活を、「焦らず、無理せず、頑張らず」で、やっていこうと思います。

白い空は、今日も私の上に。雲の切れ間から光の筋が見えました。

溝口　あかり

岐阜県出身

一九九一年―一九九四年
夫の海外駐在に帯同。サウジアラビア　アルコバールにて生活

二〇一〇年―二〇一二年
夫の海外駐在に帯同。ＵＡＥ　ドバイにて生活

一九七八年―二〇〇四年
夫の海外駐在に帯同。サウジアラビア　アルコバールにて生活

二〇一二年―二〇一四年
夫の海外駐在に帯同。サウジアラビア　リアドにて生活

アラブを理解したいという思いから、現地女性と文化交流、文化体験活動を行ってきた。
現在、帰国。文化交流活動を続けている。